（２）Örebro universitet　（オレブロ大学）

１）　概要

オレブロは首都ストックホルムから電車で２時間の距離にある中都市の一つである．この都市は現在，聴覚障害のある学生が集中する場所で，聴覚障害のある生徒のためのコースを併設した高校（Upper Secondary School）が唯一設置されている．そのため，スウェーデン全域から聴覚障害のある学生が集まってくる．そして，卒業後，そのままオレブロに在住してオレブロ大学へ進学する生徒が少なくない．オレブロ大学は，学生数約 16000 人，職員 1200 人を抱える大学で，人文，法律，社会科学，自然科学，工学，健康医療，教育，音楽・スポーツの学部がある総合大学であり，大学院も併設されている．障害学生支援担当のコーディネーター，支援スタッフ，教育学部教員，障害科学専攻の教員と面会し，インタビュー調査を行った．

２）　障害学生支援と高大連携について

オレブロ大学は聴覚障害学生の受け入れ人数において全国でトップレベルであり，サポートも充実してきている．大学として障害学生が障害のない学生と全く同じ条件で学べる環境を用意することを目標としており，対外的にもサポートの充実を謳っている．この大学では 2001 年の大学法（University Act）に則り，永続的な身体障害，先天性の障害や病気によって生じる（生じる可能性がある）学習上の障害（learning impairment）を障害として定義している．したがって一時的な怪我等による学習上の困難は，このサポートに対象にはならない．障害学生のためのコーディネーターが３人おかれていて，現在働いている３人のバックグランドは，ＯＴであったり，特殊教育の教師であったりと様々である．コーディネーターは，サポートを申請してきた学生に対して相談にのり，どのようなサポートが必要か，大学で提供可能なサポートは何か，その内容に応じた講義担当者との調整やサポート機器類の管理を主に担当している．障害学生支援に実績のある大学ではあっても，すべての教職員が障害学生への支援について十分な理解があるわけではなく，したがって，大学全体への啓蒙および学生へのサポートの呼びかけ，さらに障害学生自身に対し

て必要とするサポートを明確に述べることができるようにエンパワーメントの役割も担っている．

2004年から2009年までの６年間における障害学生受け入れ状況は表２に示すとおりである．障害内容としてはディスレキシアが最も多い．これは欧米の大学における近年の顕著な傾向であって，この大学に特徴的なことではない．我が国においては，まだ少数例しか報告しておらず，この障害については単純に比較することは控えるべきであろう．このことについては，使用言語の言語学的な特徴からディスレキシアの発生率が欧米とは異なっているという報告や，診断基準の不統一からくる統計的差異であって言語に関係なく発生するという意見など，まだ議論が継続しているところである．神経障害というカテゴリーには，我が国で近年大きな課題になってきているAD/ HDや高機能自閉，アスペルガー症候群，など発達障害が含まれており，このカテゴリーとろうのカテゴリーが多人数を占めている．

大学内の障害学生のサポートに関しては次のようなものが実施されている．

・メンターおよびアシスタント

・適切な方法による講義および文献提示

・言語サポート

・試験における特別配慮

・個別のスーパービジョン

・ノートテイク

・手話・盲ろう通訳・音声言語のテキスト変換

・ＦＭ補聴器

この中でも手話通訳は最もコストの高いサポートであって，学内のサポート財源（大学の総予算の０．３％）を調整しながら保障することが求められており，かなり困難な課題となっている．通訳者は，民間の通訳者と契約を結んでおり，上述のようにオレブロには聴覚障害に関する多くの資源があることから他大学と比較して通訳の配置はやりやすいとのことであったが，それでも通訳者の絶対数は不足しており，さらに通訳に使える費用が限られているため，いまだに十分な提供はできていないという．学生によるノートテイクも実施されているが，これには１週間に２～３時間の働きに対して１０ユーロが支払われている．

表2. オレブロ大学における障害学生の受け入れ状況

	2004	2005	2006	2007	2008	2009
ろう	40	38	38	51	52	38
難聴	23	23	20	22	23	25
盲・弱視	8	6	6	11	13	13
移動障害	25	31	29	31	24	30
ディスレキシア	73	122	140	148	173	197
神経障害	11	25	31	34	38	46
その他				3	8	10
合計	180	245	264	300	331	359

注）移動障害：肢体不自由などの理由による移動の困難を課題にしている場合，神経障害：精神障害のほか，AD/HD や高機能自閉，アスペルガー症候群などの発達障害を含む

図２は大学内の設置されている特別教室の一つで，部屋全体にループが設置され，教師はＦＭマイク（図３）を使って講義を行い，学生一人一人の座席にマイクが設置されてこれを使って発言する．主に補聴器を使用する難聴学生へのサポートを主目的に作られた部屋で,同じ仕様の部屋が複数用意されている．これらの部屋の使用のコーディネートも，障害学生支援コーディネーターの仕事である．

図２．マイク設置の教室

難聴のある学生がいる授業では，しばしばこのような特別教室で授業が行われている．

図４は，盲および弱視のある学生が，文献を読む際に使える拡大読書機およびＯＣＲによるテキスト化のためのスキャナーがセットされたＰＣや，図５のような読み上げソフトがインストールされたＰＣが設置してある Reading & Writing Room である．この部屋は図書館の中に設置されており，視覚に障害のある学生やディスレクシアのある学生などがいつでも利用できるように機器類がセットされている．この部屋専属のアシスタントがい

て，学生の機器利用および 1980 年に設置された Library of Talking books and braille からアイテムのダウンロードを補助している．スウェーデンでは，様々な文献に関してその電子テキスト化，音声化，DAIZY ファイル化を前述のＷＥＢ上の図書館で一括管理しており，障害のある学生や公共機関はパスワードを付与されて無料でダウンロードが可能である．まだ電子化されていない新しい文献に関しては，申請後約２～４週間でファイルを入手できるように進められている．

図６は特別な配慮を必要する場合に使用する部屋で，１～２人が入室可能なブースタイプの部屋になっておりＰＣ等が設置されている．大勢の学生と一緒に試験を受けることに何らかのハンディがあると考えられる場合，当該学生は事前にコーディネーターと相談する．コーディネーターは学生からの申請を受けて，その相談内容を整理吟味し，（時には適切な評価を行い）その上で各授業担当者と協議する．特別室利用の必要性が認識されると，これらの部屋の使用予定にエントリーされるという仕組みである．これらの部屋の管理および利用調整もコーディネーターの仕事である．また，学生サポートにはメンターも活用している．メンターは，本来の意義どおり先輩にあたる経験ある学生が，後輩にあたる障害学生に対して情報面，実技面，そして精神心理面で様々なサポートを行う仕組みである．オレブロ大学では，メンターは，高学年あるいは博士課程の学生が担当する場合が多いが，

図３．話者用，ＦＭマイク

図４．拡大読書器

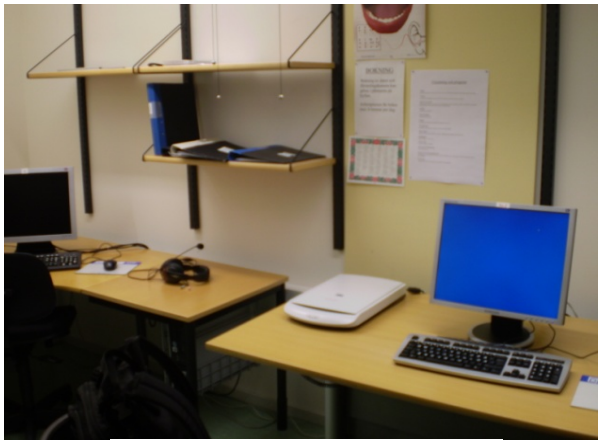

図５．ＯＣＲ用ＰＣ

人数はまだまだ少数にとどまっているという．これらのサポートはいずれも無料で提供され，その活用にあたって報告等の義務は課せられない．

図６．試験等用の特別ブース

視察において２人のコーディネーターにインタビューを行った際に話された最近の様子は次の通りである．

・調整にもっとも手間取るのはディスレキシアのある学生に対するサポートで，これはサポートを必要する学生の人数の多さが関係している．

・手話通訳については，次第に状況はよくなってきているがまだ十分とはいえない．ろうの学生の国語力（スウェーデン語）については，特に低いとは言えない．音声言語のテキスト化のサポートを求める数は少数で，多くは手話通訳を求めてくる．

・肢体不自由のある学生からのサポートの要求はあまり多くない．教室や移動環境はバリアフリーになっているところが多く，学生同士のサポートで充足しているケースもある．

・視覚障害のある学生のための特別室（上述）が設置されているが，このような機器類が図書館のすべての場所に設置されることが望まれる.「特別な」場所の設置はそれだけ「分離」を生む可能性がある．

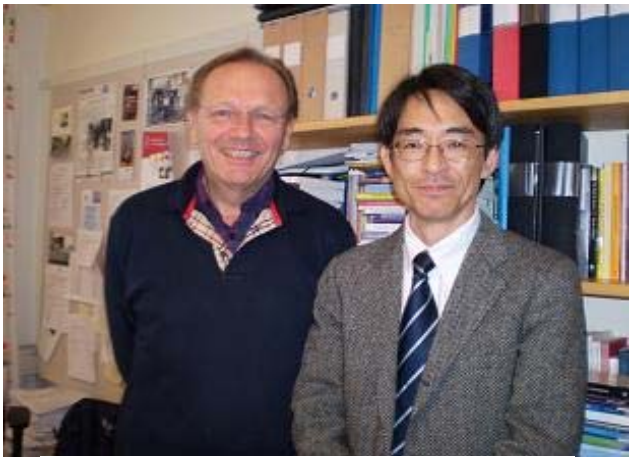

図７．Berth Danermark 教授と

・全国の大学のコーディネーターが参集する年次会議やテーマごとの研修会は，他大学の動向や新たな方法や工夫を考える上で大変役立っている．

・高校との連携については，特に定められたプログラムはない．一人ひとりの学生が進学に備えてコーディネーターを訪ねてくるケースは多くあり，そこで情報提供を行っている．その際に高校の担当教員が同行することもある．

オレブロ大学には５人のろう研究者およびろうに関する研究に取り組んでいる博士課程の３人の学生によって，ろう者におけるコミュニケーション・文化・多様性についての研究を行うグループ：KKOM-DS（図７，図８）が作られ，学習，言語使用，アイデンティティについて研究を行っている．このグループのメンバーへのインタビューによって得られた情報の要点は次の通りである．

図８．Päivi Fredäng 講師と

・高等教育における障害学生支援についての社会心理学的な背景：スウェーデンでは国の施策として,障害学生へのサポート基盤が作られてきた.障害のある人が高等教育を受け，職業選択の幅が拡大してきているという傾向は確かにある．しかしながら，ここ数年の経済状況の変化や労働市場の変化は急速で，必ずしも高等教育を受けることで就職の拡大に直結しない現状もある．スウェーデンもインクルーシヴな社会形成にむけて社会的インフラを備えていく方向を明確に打ち出している国の一つである．確かに社会経済的な意味でのインクルージョンは一定程度の了解を得てきているが，障害の概念については必ずしもまだ十分な成果を得ているとはいえない状況にあるとの話であった．高等教育に限っていえば，それは大学だけの努力で達成できるものではなく，障害当事者団体のサポートや資金獲得，政治的な文脈，特に国の施策方針の影響，そして市民の社会心理的な意識の変化，こういった諸々のプロセスが複雑に絡み合って，社会的インクルージョンが進み，その中で高等教育でのインクルージョンも変わっていける．このような面についても研究的取り組みが，現在も大学等で進行しているとのことである．

・高等教育における手話の導入（ＥＵプロジェクト：Spread the sign について）：手話がろう者の第一言語であることが公認されるようになって以来，教育の領域でも様々な変化が生まれてきている．公教育の高等学校でろうや難聴の学生は手話を必修として学ぶし，健聴の学生の中にも第２言語として手話を学ぶことを希望する学生がおり，したがって全

国レベルで手話の教師の需要が高まり,大学の手話のコースでの養成が今後も必要である.また，聴覚に障害のある学生で手話によって情報を得ることを希望する場合，基本的に通訳が保障されなければならない．そのための予算はもちろんであるが，このことそのものについての認知度を上げる必要がある．また手話そのものについて，その認知度を上げること，そして次々と生まれる新たな専門用語の標記についての検討など，手話ならではの課題に対応するために，ＥＵ全体で情報交換を行い，共同研究プロジェクトが立ち上げられた．それがＥＵプロジェクト：Spread the sign である．各国の手話表現はそれぞれに異なっているが，それらを俯瞰するツールがこれまでなかった．そこで Web 上に各国の現行使用手話のリストを掲載することを始めている．ＥＵ圏内では高校レベルから交換留学が盛んに行われており，そのプログラムに参加する生徒はこの
Web（http://www.spreadthesign.com/country/jp/）を活用している．

・教師教育

オレブロ大学の中に３００から４００人の学生を抱える教員養成のコースがあり，そこでは，一般教育，職業教育そして特別支援教育が学ばれている．KKOM-DS では，個人と社会の関係について社会文化的な展望から研究を行っており，そこでもコミュニケーションや聾に関する研究のほかに高等教育の問題も取り上げている．先述のような手話教師の養成は，特別支援教育の分野でではなく，言語学の分野をベースに展開されている．スウェーデン手話による教授法や,スウェーデン手話によるろう教育がそこでは扱われている．そして現在，ここで学ぶ学生には，スウェーデン手話とスウェーデン語の両方を使用できる力が求められる．